シャトーブリアンの駐伊フランス大使館一等書記官任官

駿　河　昌　樹

1　はじめに
2　コンコルダをめぐるフランス政府とヴァチカンの見解の相違
3　フランソワ・カコとジョゼフ・フェス
4　ナポレオンによるシャトーブリアン抜擢
5　ド・ボーモン夫人の病気療養という理由
6　シャトーブリアンの側からの利用

1　はじめに

シャトーブリアン François-René de Chateaubriand は、1803年 5 月 4 日、ローマへ派遣された外交使節の一等書記官 premier secrétaire を任じられた。フランス大使ジョゼフ・フェス Joseph Fesch に随行し、補佐する任務である。外務大臣だったタレイラン Charles-Maurice de Talleyrand-Périgord の邸宅で晩餐の饗応を受けた後、 5 月25日にはローマにむけてパリを発ち、リヨン、アルプス越えの要衝モン・スニ峠、ミラノ、フィレンツェを経由して、フェス大使より先に、 6 月27日にローマ入りした。

すでに19世紀最初の大流行作家となっていたシャトーブリアンだが、この任官は彼にとって外交官や政治家としての最初のキャリアとなった。

一等書記官としてのこの時の彼の仕事には、見るべきほどのものはない

とはいえ、1801年7月16日にローマ教皇庁とコンコルダ Concordat（宗教協約）を結んだ第一執政ナポレオン・ボナパルト Napoléon Bonaparte にとって、ローマ駐在大使に誰を随行させるかは、この頃渦巻いていた諸般の事情に鑑みて、軽視すべからざる問題のひとつだった。

本稿では、この時のシャトーブリアンの一等書記官任官をめぐる状況について瞥見し、第一執政当時の任官に関わる事情の一端に触れておきたい。

2　コンコルダをめぐるフランス政府とヴァチカンの見解の相違

ナポレオンは、宗教がなければ社会秩序はあり得ない(1)と考えていたので、1799年11月9日から10日のクーデター（ブリュメール18日）を経て、1800年1月25日に第一執政になると、フランスでのカトリック再建とローマ教皇との関係修復を急いだ。1801年7月16日、コンコルダ（宗教協約）がパリで結ばれる。署名は、ナポレオンの兄ジョゼフ・ボナパルト Joseph Bonaparte と、ローマ教皇ピウス7世 Pie VII の秘書コンサルヴィ枢機卿 Cardinal Consalvi の間で交わされた。

教皇によるナポレオンの第一執政政府の正式承認、没収教会財産の返還要求放棄への同意、国による聖職者の公定俸給支払いなどが決められ、これによって、10年におよぶフランス革命がもたらした混乱とキリスト教徒に対する迫害に一応の終止符が打たれることにはなった。カトリックはフランス人の最大多数の宗教とされることでほぼ国教となり、フランスの教会はカトリック教会の組織として再構築されることになる。フランス国内の社会的安定のための柱となることを、カトリック教会に期待できるようになった。国外においても、北イタリアやベルギー、ライン川左岸へのフランスの影響拡大が見込まれることになる。ローマ教皇にとっては、カトリックからの民衆の離教を阻止し、フランス国内の教会における教皇の精

神的権威を再興できる点で、いちおう満足できる成果が得られたといえる。

とはいえ、コンコルダは様々な妥協の産物でもあり、聖職位階制を復活させ教皇権至上主義を匂わせる一方で、革命期の聖職者民事基本法 Constitution civile du clergé を修正したような内容であったため、すぐに問題が発生した。たとえば、司祭の任命権はフランス政府にあるとされながら、第４条では「教会法にかなった制度」を教皇に委ねていて、叙任権は教皇にあるとされたりしていた。

革命期の1791年11月、聖職者民事基本法を受け入れて公民宣言をするように聖職者に要求する決議がなされ、宣誓を拒否する聖職者には追放、年金停止、拘束等の措置が採られたが、この時に公民宣言をした聖職者たちは、コンコルダの時点でも、ヴァチカンからはなおも棄教者と見なされていた。

ボナパルトはこれに対し、国内における和解を配慮して、公民宣誓拒否者たちの陣営でも、公民宣誓者たちの陣営でも、同様に任命をしなければならなかった。公民宣誓者たちにとってみれば、コンコルダを受け入れることは聖職者民事基本法の否認を意味する。かつて行った聖職者民事基本法への宣誓の撤回を彼らに求めるのでなければ、コンコルダの受け入れはできないことになるが、これは彼らに屈辱を強いることになった。

しかしながら、ヴァチカンの見解は異なっていた。とりたてて聖職者民事基本法に言及することなしにコンコルダを単に受諾するのならば、聖職者民事基本法を否認することにはならない、という理屈だった。

教皇を中心とする教会行政の中央機関は、棄教者たちには手当を支給したくなかったので、棄教の有無を際立たせるようなやり方には消極的だった。

結局、最初の任命者45人のうちの12人の「公民宣誓」司祭が問題となった際、これだけの数の関係者全員のうちで、口頭での撤回は一人だけであり、それが二人の証人の前で確認されたということで満足せねばならなか

った。

組織に関する条項においても問題が生じた。コンコルダに署名することで、ヴァチカンは、棄教の根絶とフランスの教会における権威の再興を目指そうとした。ヴァチカンは、フランス政府が信仰実践についての規制をやめる文言を引き出せるものと考えていたが、ボナパルトの考えははるかに介入主義的なものだった。カトリック信仰の枠内で、教皇庁に対し、フランス教会の独立を主張するガリカニスム gallicanisme を主張する助言者たちの影響下にあったためである。とりわけ、タレイランは急先鋒だった。

そのため、コンコルダのテキストにくわえて、1802年４月４日に立法院に提出された組織法には、フランスの教会に対しローマの権威を制限する77項目の解釈的法律が含まれていた。たとえば、フランスの聖職者が、教皇書簡、公会議の決議書、教皇の使節を受け取る際には、政府の許可が必要である、といった類である。

こうした宗教的な面での不一致にくわえて、領土の問題もあった。1797年のトレンティノ Tolentino 条約で、教皇庁はアヴィニョン Avignon とコンタ・ヴネサン Comtat Venaissin をフランスに譲っていた。イタリアでは、チザルピーナ共和国 Repubblica Cisalpina を構成するために、ボローニャBologna、フェラーラ Ferrara、ロマーニャRomagna というローマ教皇特使の三つの管轄領がモデナ Modena に統合されていたが、これらの地方はローマのうちでは最も豊かだった州である。

ヴァチカンの領土保有の解体を推進するべきかどうかがおそらく検討され、その結果、ボナパルトは結局、フランスの庇護下に入った独立した教皇州という概念を受け入れることになる。しかし、境界に関しては、チザルピーナ共和国の境界をそのままヴァチカンに復元させることなどは問題外だった。ヴァチカンにとって、これは苦い仕打ちとなった。

このようなわけで、1801年のコンコルダは、数か月後には大きな裂け目を露呈させるようになる。

この裂け目を埋め、フランスとヴァチカンの関係を調整するという微妙な務めは、外交官に託されることになった。外交官ひとりひとりの個性や個人的な働きが重要な時代であったので、フランスから誰を派遣するかは重要な問題となった。

3　フランソワ・カコとジョゼフ・フェス

教皇は、自分の代理として、カプララ枢機卿 cardinal Caprara をパリに派遣していた。外交経験豊富な人物で、ドイツ語圏でのキャリアが長く、とりわけ1785年から1792年にかけてウィーンに滞在した。ヨーゼフⅡ世に対して押しが甘いとの批判があったが、協調性があり柔軟だった彼は、最高度の危機を避けるために譲歩をしたわけで、気骨や政治的明敏さを欠いていたわけではなかった。

フランス側では、最初、ローマへ送る代表としてフランソワ・カコ François Cacault の名が挙がっていた。キャリアを積んだ外交官で、イタリアに習熟した人物である。1783年にナポリで外交を始めて以来、イタリア半島をほとんど離れたことがなかった。1796年にボナパルトに会ったが、彼はその時、ボナパルトからイタリアに関する諸事を任されている。そのため、1801年にローマへ全権公使を送る決定がなされた時も、第一執政はすぐに彼のことを考えた。

ド・ベルニ枢機卿 cardinal de Bernis の時代には第一級の場として知られていたローマのフランス大使館を、ふたたび見事に甦らせる必要があった。25年間にわたって、ド・ベルニは彼の宮殿を特権的な集まりの場としていた。大使館のまわりに多くの宗教施設が作られるようにし、昔からローマで威信のあるアカデミーの活動の場とさせた。彼の影響は、敬虔なキリスト教信者だったフランス国王がローマで示すべき役割に、みごとに対応していた。1774年のコンクラーヴェの際には、彼は、有力な選挙人としてピウスⅥ世 Pie Ⅵを選んでいる。

カコは、コンコルダが署名される前から、このベルニの事績に倣おうとしており、困難な中でもうまく活動していた。パリで行われていた宗教関連の議論には関わり合わずに、教皇の州へのフランスの保護を知らしめたり、それらの州とチザルピーナ共和国との関係の修復をしたり、フランスとの財政問題を整理したりして、永遠の都ローマにおけるフランス代表の威信を再興しようとしていた。

ボナパルトは、しかし、経験のある外交官よりも、教皇とフランスとの関係における彼自身の個人的利益をもっと強く打ち出してくれる人物をローマに送りたいと考えていた。ド・ベルニ枢機卿がフランス国王にとってそうだったように、ボナパルト自身にとってのド・ベルニ枢機卿となってくれるような、枢機卿以上の人物。それも、近親者。それが、ジョゼフ・フェスだった。

フェスは、歩兵隊の士官だったスイス人を父として、また、未亡人だったラモリーノ Ramolino 家の娘アンジェラ・マリア・ピエトラ・サンタ Angela Maria Pietra-Santa を母として、1763年にコルシカ島 Corse のアジャッシオ Ajaccio で生まれた。母が最初の結婚の時に生んだ娘マリア・レティツィア Maria-Letizia は、カルロ＝マリア・デ・ブオナパルテ Carlo-Maria de Buonaparte という男と結婚することになるが、このふたりが後の皇帝ナポレオン・ブオナパルテ（ボナパルト）の両親となる。このことから、フェスはナポレオンの母の弟ということになり、未来の皇帝の叔父ということになった。ふたりの年齢差は6歳しかなく、フェスは7歳で父を失ったため、甥たちの近くで青年期を過ごした。

エクサン＝プロヴァンス Aix-en-Provence の神学校を出ると、彼は1785年に22歳で司祭となり、アジャッシオに帰る。1787年には副司教に任じられた。革命が始まると彼はすぐに新しい思想に与し、コルシカ島における司祭の公民宣言の運動の推進者となった。ブオナパルテ家とともに共和国への忠誠を表明した。

1794年、若きナポレオン・ボナパルトがトゥーロン攻囲 Siège de

Toulon の際に砲兵連隊長に任命されると、フェスはすぐに聖職を離れ、倉庫警備としてボセ Beausset に移る。ナポレオンがイタリア遠征軍旅団長に任命されると、フェスは資材供給の仕事を保証されることになり、彼の商売は繁盛し、たちまち富を築いていくことになる。フランス軍がロンバルディア Lombardia で税金として奪った絵画の収集も始めた。

1799年にパリに移り、ブリュメール18日のクーデターの後には、彼の繁栄にさらに新たな展開が加わってくる。1802年には聖職に戻り、10月にはリヨンの大司教、1803年2月には枢機卿となった。そして同年4月、ローマ大使に任命されようとしていたわけだった。

聖職に復帰してからの彼は、世間的な批判の対象になるのは避けねばならなかったはずだが、勤勉な性格だったとはいえ、強情なところもあり、威圧的でもあって、とりわけ、富への執着は強かった。思索型ではなく、行動型の人間だった。他人の蔭に置かれるのには耐えられず、疑い深い上、逆上することも多かった。

ナポレオンからすれば、ともに繁栄の道を歩んできたこの叔父をぜひ使いたいと考える一方、彼のこうした性格を抑える必要も痛感していただろう。フェスと全く違う性格のシャトーブリアンを補佐に付けることの利点が、ここに浮上してくることになる。

フェスをローマ大使に任命する政令は1803年4月4日に出た。外務大臣タレイランが公式の通達書に署名したのは5月20日となっている。この一月半におよぶ遅れに、現代の外交官であるド・セドゥイ Jacques-Alain de Sédouy は、タレイランの思惑が働いた可能性を推察している(2)。この時のローマ大使任命を純粋に外交的な性格のものに限るようにし、ナポレオン個人とその叔父の利益が編み込まれるのを忌避したのではないか、というのだ。1801年にカコを全権公使としてローマに送った時と比べて、今回のフェスの任命は、イタリア全土と地中海全域を利益対象とするフランスの関心を表わすものといえるが、これが、フランスにとってというより、ナポレオンとその親族にとって、より一層の利益を生む可能性があるのを

タレイランは嗅ぎ取っていた、と見るべきかもしれないということである。

4　ナポレオンによるシャトーブリアン抜擢

フェスに随行する一等書記官については、カコは自分の秘書だったアルトーArtaudを推しており、フェス自身は、自分の権限を押しつけやすいような、あまり活動的でない、目立たない人物を望んでいた。カトリックの指導部のポルタリス Portalis のところで働いていたジョフレ Jauffret という人物を考えていた形跡がある。

第一執政ナポレオンは異なった判断をしていたらしい。のちにシャトーブリアンが書いた『墓の彼方からの回想 *Mémoires d'outre-tombe*』によれば、シャトーブリアンがこの時期に出版して大成功を博していた『キリスト教精髄 *Génie du Christianisme*』についてのナポレオンの認識や、パーティーでのシャトーブリアンとの出会いの印象が、ナポレオンにシャトーブリアン採用を決意させたのではないか、ということになっている。

シャトーブリアンの『墓の彼方からの回想』は、彼の人生や社会についてのみならず、政界や社交界についても第一級の資料的価値を有するものだが、同時に、全編にわたって真偽をあわせ含む記述よりなる文学作品でもあるので、そこに書かれている内容や表現をそのまま事実や真実として受けとめるわけにはいかない。史実的には確かでも、出来事が展開された場面の記述には多分に変更が加えられていると考えておく必要がある。最後に書き残した者こそがすべての歴史を支配する、という真理を、シャトーブリアンほど体得していた者はない。

それでも、ナポレオンという人物の当時の印象を伝えるものでもあるので、シャトーブリアン自身が書くナポレオンとの出会いを見ておくことにしたい。

> 立法府によるコンコルダの採択の後で、内務大臣のリュシアン・ボナパルト Lucien Bonaparte は兄のためにパーティーを開いた。キリスト教の力

を結集させ、ふたたび地位に就けたということで、私はそこに招かれた。歩廊にいると、ナポレオンが入って来た。ひと目でわかり、印象はよかった。それまでは、遠巻きにしか彼を見たことはなかった。彼の微笑みは優しそうで、気持ちがよかった。眉毛に縁どられ、額の下に輝いている目がすばらしかった。まなざしには、まだ、はったりも、芝居じみたところも、わざとらしさも微塵もなかった。当時、世間で大いに騒がれていた『キリスト教精髄』に、ナポレオンは影響されていた。驚くべき想像力が、この冷淡な政治家を揺り動かしていた。彼の内に詩の女神がいなかったならば、彼はあのようではなかっただろう。詩人の抱くような思念を内部に持っていて、それをまた、内部の理性がしっかり完成させていく。そういった人物だった。大きな洞察力に恵まれたこうした人間たちは、つねにふたつの性質から成っている。霊感を得ることと行動を遂行することをともに可能にするには、これらのふたつが必要だからだ。一方は計画をつくり、他方がそれを成就するのである。

ボナパルトは私に気づき、私が誰なのかわかった。どうして私だと知れたのか、わからない。私のほうへ向かってくる時、彼が誰を探しているのか、周囲の人々にはわからなかった。列を成している人々が、順々に場所を開けていく。執政が自分のところで立ち止まってくれるのを、誰もが期待していた。彼は、こうした思い違いに、なにがしか、苛立ちを感じていたようだった。私は、まわりにいた人たちの中に潜り込もうとしていた。ボナパルトは突然声を上げ、「シャトーブリアンさん！」と声をかけてきた。人々がサッと退いたので、私ひとり、前に出たようにして残ったが、すぐに人々の輪は私たちふたりを取り囲んだ。ボナパルトは、じつに気軽な感じで私に話してきた。まるで私が彼の親友であるかのように、お世辞を言うでもなく、無意味な質問もせず、前置きもなしに、すぐにエジプトのことやアラブ人たちのことを語りはじめた。ふたりの間で以前に始められていた会話を続けるかのようだった。「いつも感銘を受けましたよ」と彼は言うのだった。「長老たちが砂漠のなかで跪いて、東のほうを向き、額を砂につけているのを見るとね。彼らが崇める東のほうの未知のものは、なんだったんでしょう？」

ボナパルトは話を止め、いきなり他のことに移った。「キリスト教？ 思想家たちは、キリスト教から天文学の体系を作ろうとしたんじゃないかな？ それができれば、キリスト教の小ささを私に納得させられる、とでも思っているんだろうか？ キリスト教が、天界の運動の寓意や星々の幾何学であるとしても、優れた頭脳たちは無駄なことをやっているわけですね。

彼らの意に反して、彼らはなおも、おぞましいまでに、かなりの偉大さを手つかずのまま残しているんだから」。

饒舌なボナパルトは離れていった。ヨブ記にあるように、私の夜の中、「ひとりの精霊が私の前を過ぎて行った。私の身体の総毛が逆立った。彼はそこにいる。彼の顔はわからない。小さな呼吸の音のような声が聞こえた」と思った。

私の人生の日々は、さまざまな幻影の連続でしかなかった。地獄と天界が引き続き私の足元や頭上に開かれ、それらの闇の深さやひかりの深さを推し量る暇もなかった。私はふたつの世界の岸辺で一度だけ、前の世紀の人ワシントンと新しい世紀の人ナポレオンに出会った。ふたりとも私を孤独へと引き戻した。ひとりは優しい願いによって、もうひとりは犯罪によって。

人々の群れるなかを歩き廻りながら、ボナパルトが、私の前で立ちどまって私に話しかけた時よりも深い眼差しを、こちらに投げかけていることに、私は気づいた。私も彼のことを目で追い続けた。

Chi è quel grande, che non par che curi
L'incendio ?
(《火事を気にかけないこの大人物は誰か？》　ダンテ)(3)

ナポレオン・ボナパルトがシャトーブリアンのことをどう思っていたか、もちろんここからは窺い知れないが、場合によっては使える駒として、彼のことを考え始めていたかもしれない。

シャトーブリアンはそのように推察したらしく、『墓の彼方からの回想』をさらに見ていくと、このように書かれている。

この会見の後で、ボナパルトはローマに私を送ることを考えた。私がどこでどのように役立つか、彼はひと目で判断したのだ。私が外交の仕事に就いたことがなく、外交実践の初歩さえ知らないことなど、彼にはどうでもよかった。彼は、このような精神はどんな時にもやれるものだと考え、見習い期間など必要ないものと考えていた。人材の偉大な発見者だった。しかし、彼は人間たちの才能が彼のためだけのものであるのを望み、その才能がほとんど人々の口に上らないのを求めた。あらゆる名声に嫉妬深かった彼は、自分以外の人間の名声というものを、彼の名声の簒奪のように見ていたのである。宇宙の中にはナポレオンしか存在してはならなかっ

た[4]。

シャトーブリアンの才能を見出し、大抜擢してくれたとはいえ、ナポレオンは難しい相手だった。このことは後に、シャトーブリアン自身の死まで続くナポレオンについての継続的な考察の種となっていく。

ともあれ、ここで読み取っておくべきことは、ナポレオンが自らシャトーブリアンをローマへの外交使節の一等書記官に抜擢した、とシャトーブリアン自身が書いていることである。

事実とフィクションを織り交ぜた大回想録の作者であり、自身、後に大使や外務大臣や貴族院議員になったシャトーブリアンにあっては、もちろん、書いていることと認識していることとは同一ではない場合が多々あるのは、当然のこととして受け止めておかなければならない。

5　ド・ボーモン夫人の病気療養という理由

シャトーブリアンに一等書記官のことが伝えられる過程には、ナポレオンの妹エリザ・バッキオッキ Eliza Bacciochi（あるいはマリ＝アンヌ・ボナパルト Marie-Anne Bonaparte）と、作家でありシャトーブリアンの親友で庇護者だったフォンターヌ Jean-Pierre Louis de Fontanes がおり、また、ナポレオンの意志を伝えたのはエムリ神父 abbé Emery という人物だったらしい。

エリザ・バッキオッキは、フォンターヌとシャトーブリアンの庇護者であり、フォンターヌの愛人でもあった。リュシアン・ボナパルトは周囲にインテリたちを集めるのを好み、夫の凡庸さを嫌っていたエリザ・バッキオッキは、そこに形成されるグループの常連だった。

フォンターヌは、現在の視点から見れば、どちらかといえば凡庸な作家と見られるが、ラシーヌ Racine やフェヌロン Fénelon の方向性の継承者で、あらゆる破壊的な新傾向に反対し、伝統の保存と完成を尊ぶ、古典主

義的な調和を大事にする作家だった。政治的なセンスに秀で、ブリュメール18日のクーデター以後、〈メルキュール・ド・フランス Mercure de France〉誌で批評を行うようになると、第一執政となったナポレオンの寵愛を受けるようになる。1800年２月８日には、アンバリッドでのジョージ・ワシントン追悼演説をナポレオンから直々に頼まれるまでになる。その後は、コレージュ・デ・カトル－ナスィヨン Collège des Quatre-Nations の文学教授、フランス学士院会員 membre de l'Institut de France、国会議員、アカデミーフランセーズ会員 membre de l'Académie française、立法院議員 membre du Corps législatif および議長、ナポレオン大学の最初の教授 premier Grand maître de l'Université de Napoléon などを務めていくことになる。

エリザ・バッキオッキやフォンターヌが属しており、シャトーブリアンも招き入れられたリュシアン・ボナパルトのグループについて、ジョゼフ・フーシェJoseph Fouché は、かつてジャコバン派だった人物らしい感情を込めながら、「宗教的で君主政主義的であると自称する連中の徒党」と評している。ともあれ、このグループが、ナポレオンにとっての強力なブレーンのひとつであったことは疑いない。

エムリ神父には謎の側面があるが、シャトーブリアンが1791年に北アメリカに旅に出た時、船上でこの神父に出会っている。コンコルダの署名の際には、第一執政ナポレオンの非公式な助言者として宗教的側面について指導し、大きな影響を与えたと見られている。

さて、ナポレオンとの会見の後に起こったことを、シャトーブリアンはこのように書いている。

> フォンターヌとバッキオッキ夫人は、執政が私と“会話”したことに満足していると言った。私は口を開きさえしなかったというのに、あれを“会話”と呼ぶとは。ともあれ、それは、ボナパルトが彼自身満足しているということを意味していた。彼らは、チャンスを逃さないように、と私を急かした。私は、何者かになるという考えを持ったことはまったくなかっ

たので、きっぱりと拒否した。すると、私の抗いがたいひとりの権威者に話を持って来させたのだった。

サン＝シュルピス教会の神学校の上長者であるエムリ神父が私のところへ来て、宗教の善のために、ボナパルトが叔父のフェス枢機卿に振り当てる外交使節の一等書記官の仕事を受け入れてほしい、と聖職者の名において懇願した。枢機卿の理性はあまり芳しくはないので、私がすぐに仕事を取り仕切ることになるだろうと、私に理解させた。

(……)

彼は最初の試みでは失敗した。任務を負ってふたたび来訪し、その根気強さに負けて、私は決意し、彼の使命に沿うかたちで、私に勧められているポストを受け入れた。とはいえ、要請されているポストに就いて私が役に立つのかどうか、私としては少しも納得したわけではなかった。セカンドの立場で行くのではなんの意味もない(5)。

エムリ神父の懇願を一度目は固辞したようだが、ふたたび出向いてきた際にシャトーブリアンは説得され、受け入れたということらしい。

このすぐ後で、シャトーブリアンは、ド・ボーモン夫人 Madame de Beaumont について短く書き添えている。

頭に浮かんだド・ボーモン夫人のことが私のためらいに終止符を打ちに来なければ、私はなおも尻ごみし続けていただろう。ド・モンモラン氏 M.de Montmorin の娘は死にかけていた。イタリアの気候は彼女にはよいだろうとのことだったので、私がローマに行くのにあわせて、彼女はアルプスを越える決意をした。彼女を救えるかもしれないという希望に、私は身を献げることにした(6)。

ド・ボーモン夫人とは、ド・ボーモン伯爵夫人 comtesse de Beaumont、ポリーヌ・ド・ボーモン Pauline de Beaumont で、モンモラン＝サン＝テラン伯爵 comte de Montmorin-Saint-Hérem の娘である。モンモラン伯爵は18世紀半ばから後半にかけて、スペイン大使、ブルターニュ国王軍指揮官、外務大臣などを務めた重要人物で、フランス革命の際、1792年８月10日のパリのセクションのサン＝キュロットによるチュィルリ宮襲撃、いわゆる《第二の革命》で捕まって投獄され、９月虐殺事件で命を落とし

た。

ド・ボーモン夫人はパッシィ城 château de Passy に逃れて生きのびたものの、母や弟はギロチンで斬首され、姉は監獄の病棟で亡くなり、彼女自身もその後は農民の家に逃れて凌いだ。作家で思想家のジュベール Joseph Joubert の家族が彼女を引き取り、アルプス寄りの町ヴィルヌーヴ Villeneuve に住まわせて世話をする。1798年にパリに帰り、1800年にパスキエ Etienne-Denis Pasquier からヌーヴ・デゥ・ルクサンブール Neuve-du-Luxembourg のアパルトマンを与えられたが、この場所が、フォンターヌやボナルド Louis de Bonald、モレ Louis-Mathieu Molé、パスキエ、シェヌドレ Charles-Julien Lioult de Chênedollé、ゲノ・ド・ミュスィ Guéneau de Mussy、スタール夫人 Madame de Staël 、ド・ソスュール姉妹ことヴァンティミル Vintimille Saussure とオカール Hocquart Saussure などが集まる場所となる。

シャトーブリアンはジュベールの紹介で1801年にここに招かれ、以後、ド・ボーモン夫人とシャトーブリアンは恋愛関係に入った。ド・ボーモン夫人は、シャトーブリアンが落ち着いて『キリスト教精髄』の完成に取り組めるようにサヴィニ＝シュル＝オルジュSavigny-sur-Orge に家を借り、ふたりでそこに住むことになり、ジュベールの家族やシャトーブリアンの姉リュシルをそこに招いたりしたが、この頃にはすでに結核に冒されていた。

「頭に浮かんだド・ボーモン夫人のこと」がシャトーブリアンに一等書記官の任務を受け入れさせたのだとすれば、シャトーブリアンの側としても、ナポレオンからの申し出を個人的な事情から受け入れたことになる。ナポレオンの第一執政時代のフランスの政治の裏側が、すべて、こうした個人的な利益や事情のせめぎ合いで織り成されていたとまで邪推するのは行き過ぎだろうが、大なり小なり、様々な過程にこうしたものの影響があったのは確かなことなのだろう。

6　シャトーブリアンの側からの利用

結核の療養のためにイタリアへ移るのを決めた頃のド・ボーモン夫人は、シャトーブリアンの友人で、ルイ18世治下やルイ＝フィリップ治下に大臣を歴任したモレの表現を借りれば、すでに「ぞっとするほど痩せ細っていた」[(7)]が、それでも知性に溢れ活動的で、シャトーブリアンに恋い焦がれていた。

回想録に書かれた内容とは違って、実際にはシャトーブリアンは、彼女がローマに来るのを禁じている。ド・ボーモン夫人はアルプスのモンドール Mont d'Or に留められ、シャトーブリアンが行かせた医師たちの治療をそこで受けた。それでも、1789年から1944年まで続いた有名な新聞〈デバ〉紙 Journal des Débats の創設者で社主のルイ・ベルタン Louis Bertin がミラノから彼女を運び、フィレンツェで待っていたシャトーブリアンに委ねている。その後、シャトーブリアンとド・ボーモン夫人はローマに着き、11月４日、シャトーブリアンの腕の中で彼女は息を引き取った。

このあたりの経緯は『墓の彼方からの回想』の有名な部分のひとつであり、シャトーブリアン研究の要点のひとつだが、付言しておけば、じつは、イタリアに向かう時点ですでに、彼の心はド・ボーモン夫人を離れ、デルフィーヌ・ド・キュスティーヌ Delphine de Custine に向かっていたのがわかっている。キュスティーヌ伯爵夫人ことデルフィーヌ・ド・サブラン Delphine de Sabran, comtesse de Custine で、この女性も、革命で夫と義父をギロチンで失い、苦渋を舐めてきた未亡人である。ただ、彼女の場合は、悪名高い政治家ジョゼフ・フーシェの庇護を受けて財産を再興し、カルヴァドスにフェルヴァック城 château de Fervaques を買って、そこにシャトーブリアンやシェヌドレをたびたび招いている。シャトーブリアンとの恋愛関係は1802年に始まり1805年に終わったようだが、このふたりの場合、忌憚のない友情は最後まで続いたらしい。

このように見てくると、身内の利益のためにヴァチカンとの外交を利用したナポレオン・ボナパルトの決定を、シャトーブリアンの側でも、じつは、大いに利用していたと言えそうである。

忘れてならないのは、18世紀半ばから19世紀前半までのヨーロッパ社会や政界、社交界の全容を視野に収めた一大回想録作家として、シャトーブリアンは、これ以後、40年以上の歳月をかけて、くり返しナポレオンについての批判的考察をし続け、ナポレオンを人物分析や評価の対象とし続けて、作家としての仕事の糧としていったことだろう。時代を書き残す者だけが、つねに、歴史の最終勝利者となるのだとすれば、ナポレオンとの政治駆け引きにおいては、シャトーブリアンのほうも、おさおさ劣勢に立ったというわけではなさそうである。

註

（1） ナポレオンが信頼していた作家でジャーナリストのフォンターヌ Louis de Fontanes は、1801年４月18日に、ナポレオンの弟リュシアン・ボナパルト Lucien Bonaparte に「Point de culte, point de gouvernement（宗教なくば、統治なし）」と書いている。フォンターヌが庇護していた年下のシャトーブリアンも、『キリスト教精髄』の中で「Détruisez le culte et il vous faudra dans chaque village une police, des prisons et des bourreaux（宗教を破壊してみたまえ、どこの村でも警察が、牢獄が、死刑執行人が必要になるだろう）」と書いている。ナポレオン周辺の人々の共通見解だったかもしれないが、フォンターヌがこの発想の源だったかもしれない。

（2） Jacques Alain de Sédouy, *Chateaubriand Un diplomate insolite*, Perrin, 1992., p.28.

（3） Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, tome Ⅰ, éd.Maurice Levaillant et Georges Moulinier, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1951, pp.490-492. 訳文は拙訳。必要に応じて意訳した箇所がある。以下の引用においても同様。

（4） Ibid., p.492.

（5） Ibid., pp.492-493.

（6） Ibid., p.493.

（7） Jacques Alain de Sédouy, *Chateaubriand Un diplomate insolite*,

Perrin, 1992., p.31.

主な参考文献

・Chateaubriand, *Mémoires d'outre-tombe*, tome Ⅰ et Ⅱ, éd.Maurice Levaillant et Georges Moulinier, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1951.
・Maurice Paléologue, *Talleyrand Metternich Chateaubriand*, Hachette, 1928.
・Jacques Alain de Sédouy, *Chateaubriand Un diplomate insolite*, Perrin, 1992.
・Jean-paul Clément, *Chateaubriand politique*, Hachette, Collection Pluriel, 1987.
・Jean-paul Clément, *Chateaubriand Biographie morale et intellectuelle*, Flammarion, 1998.
・Jean-Claude Berchet, *Chateaubriand*, Gallimard, « Biographies *nrf* Gallimard », 2012.
・Pierre Moreau, *Chateaubriand L'HOMME ET L'OEUVRE*, «Connaissances des Lettres», Hatier-Boivin, 1956.